

風俗嬢の労働は、 ごくふつうの労働なのか 橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう●1948年、神奈川県生まれ、
社会学者。東京工業大学教授
主な著書に『性愛論』(1995,岩波書店)
『橋爪大三郎コレクション(2)性空間論』(1993,勁草書房)
『言語派社会学の原理』(2000,洋泉社)などがある。

「風俗嬢」の実態調査は、ありそうでなかったもののひとつである。今回の調査報告が出版されることの意義は大きいと思う。実態がわかっていなければ、根拠のある議論をするのはむずかしいからだ。

私の役目は、この調査を読んで、「社会的」にコメントすることである。

そこですぐそれを始めようかと思ったが、その前に、風俗「概

年に新しい風俗営業法ができて、一律に法の網をかけることになった。これ以後、「風俗」とか「フーズク」とか言えば、ソープランドやファッション・ヘルスをはじめとする性関連サービス産業を意味することになる。「風俗嬢」は、そうしたサービスに従事する女性たちである。「風俗」は、本番系(ソープランドなど)／非本番系(ファッション・ヘルスなど)に大別されるが、本書はそのうち、非本番系の風俗嬢に対するアンケート調査を試みたものだ。

以上、概論おわり。

さて、本書の著者たちの主張は、風俗産業に従事する女性たちの実態を認識し、権利を保護し、ほかの労働と同じように風俗労働の正当性を社会が認知すべきである、ということのようである。

最後のところは、すこし無理ではないかと、私は思う。

たしかに、昔の「遊廓」とはまったく違って、ソープランドは働く女性の自由意思が前提になった、ふつうの職場になっている(辞めなければすぐ辞められるし、店も移動できる)。そのソープランドに比べても、非本番系の風俗産業は、さらに垣根が低くなっている。風俗嬢は、少なからぬOLや学生にとって、しばらく勤めてはまた辞める、選択肢のひとつになっていると言えるだろう。

にもかかわらず、風俗はやはりふつうの労働ではない。なぜふつうの労働でないかと言えば、それが性的サービスだから、この社会のずいぶん多くの人びとが、対価を受け取ってそれを提供することに抵抗を感じるような種類の労働(サービス)だからである。とすれば、風俗労働を、ほかの労働とまったく同列に扱うべきだという主張には、無理があると言わざるをえない。

人びとが性的サービスに対して覚える「抵抗」には、ほんとうにちゃんとした根拠があるのか。それは、偏見にすぎないのではないか。風俗労働を、そのほかの労働と同様に扱うことこそ、正しいのではないか。こうした議論はいちどきちんとやっておいたほうがよいが、きつと長くなる。私はここで、その議論と関係なく、つぎ

論」をのべておきたい。

と言うのは、同時代の読者なら、「風俗嬢」がどんな人びとかいまさら説明するまでもないだろうが、たとえば本書を図書館でみつける50年後の若者にとっては、ちんぷんかんぷんになっている可能性が高いと思ったからである。現在のわれわれが「従軍慰安婦」について、いちから勉強しなければならないのと同じことだ。

1945年、第二次世界大戦で敗北してからの半世紀あまりを、「戦後日本」という。

戦後の性風俗の転換点となったのは、1956(昭和31)年に施行された、売春防止法であろう。明治以来、日本は長いあいだ、売春を公認してきた。戦後も、東京でいえば吉原など特定の地域に限って売春営業が許められていた。警察の地図を赤い線で囲ってあったため、「赤線地帯」といわれた。それが廃止されたのは、東京オリンピック(1964年)を前に、東京を「近代的」な都市に生まれ変わらせる必要が生じたからだ。

いったん地下にもぐった売春はまもなく、特殊公衆浴場(トルコ風呂、のちにソープランド)のかたちで、公然と復活する。個室で入浴する客と、サービスする従業員(トルコ嬢、のちにソープ嬢)との「自由恋愛」なので、売春防止法にひっかからないのだ。1970年代初めに、「マット洗い」が発明されるとなお人気をよび、日本各地にこの営業形態が広がった。もともとソープランドは、浴場としての営業許可が必要なため、大都市の繁華街に新しく開店するわけにはいかなかった。

1980年代になると、東京でいえば渋谷や新宿、池袋など大都市中心部の繁華街に、ファッション・ヘルスといった新しいタイプの店が目立つようになった。これは、ソープランドの「本番」(性器を結合する性行為)はやらないが、それ以外のいろいろな性的サービスを提供するものである。ファッション・ヘルスのほかにも似たようなサービス営業がたくさん生まれたので、1993(平成5)

のことが言えると思う。第一に、人びとが覚える「抵抗」は、その社会にわけもたれて通念(道徳や倫理観)を反映している。第二に、人びとが「抵抗」を覚えるほど、そうした性的サービスを提供することの対価は高くなる。第三に、風俗労働は、まさにそうしたことを前提にする労働なので、ほかの労働とまったく同列に論じることとはできない。

以上のことを、風俗嬢たちはよく認識していると思う。今回の調査も、そのことをよく裏付けている。

風俗は、収入が高い。彼女らが働く動機は、まずこれである。

いっぽう、風俗で働いていると、おおっぴらには話にくい(親バレ、恋人バレ、アリバイ会社)。そのことで、罪悪感を感じる。病気やストーカーなどの危険もあるし、嫌な思いもしなければならぬ。要するに、リスクが高い。

高収入と、リスク。この二つは組みになっている。互いに原因となり、結果となっている。ここから、リスクだけを取り除くことはできないのである。むろん、不必要なリスク(病気やストーカーや人権侵害や……)は、ないにこしたことはない。けれども、リスクの本質は、性的サービスを特別なものとみる同時代の人びとの感覚(抵抗)なのであって、それは(少なくとも当面のあいだ)取り除けない。

それでは、このことを所与とした場合に、なにが起こるだろうか。

人びとが、リスクをどの程度のコストと覚えるかは、一様でない。ある個人は、性的サービスを提供することに抵抗感がない。またある個人は、家族がそうした抵抗感をもっていない。さらに、人びとが収入の高さを、どの程度のインセンティブと覚えるかも、一様でない。結局、コストをより小さく感じ、そして／または、収入により大きなインセンティブを感じる個人が、風俗産業に参入しやすくなる。その反対に、そうでない個人は参入しにくくなる。人

びとがみな合理的に行動するとしても、その結果はまちまちである。そして、自分と違ったふうに行動する人びとが、合理的に行動しているとは思えなかったりする。個々人の状況や考え方が違うのだから、人びとが一致して行動することはない。また、人びとが一致した見解に到達することもないだろう。

さらに、人びとは、自分と違ったふうに行動し、考える人びとがいることから、利益をえているとさえ考えられる。風俗労働に従事する人びとは、それ以外の多くの人びとがその市場に参入するのをためらっているおかげで、相対的に高い収入をえることができる。(その分、リスクは高くなるかもしれないが、甘受できる範囲内であろう。) いっぽう、そうでない人びとは、自由意思で風俗労働に従事する人びとがいるおかげで、自由意思で風俗労働に従事しない自分に対して心理的な満足を感じることができ。(その分、収入の低い職しかみつからないかもしれないが、甘受できる範囲内であろう。)

したがって、風俗労働に対する「偏見」が完全になくなることは、風俗労働そのものの否定につながる。本書の著者たちの主張が少し無理ではないかと言ったのは、そういう意味である。

現状を批判的にとらえるもうひとつのやり方は、男女を隔てるフェミニズムの線分を入れることである。経済的資源や権力をはじめ、さまざまな資源が男女のあいだで不平等に分配されている。資源の移動(再分配)は男女のあいだで、この不平等を是正する方向におこる。噛み砕いていうと、力のある男性と弱い関係を築いた女性は、ほかの男性や女性をしりめに、その男性を通してさまざまな資源を享受することができる。性的サービスを提供する女性が少なければ、その女性たちは、不当に男性が蓄えた資源の大きな分配にありつけることになる。風俗嬢の高い収入は、大多数の女性を裏切った代価であり、社会的非難そのほかのリスクを覚悟するのは当然、というわけだ。

私個人は、こうした議論にも与したくないと思っている。

男性と女性のあいだで、資源の分配が不平等だとしたら、もちろんそれは問題だ。ただし私が思うに、女性は階級ではないし、男性と女性が階級しながらにグループとして敵対しあっているわけではない。個々の女性は(男性も)、自分に与えられた能力と機会を生かして、最善の人生を送る自由があると思う。それには、どんな人生の選択肢も、風俗産業に従事するという選択肢を含めて、あらかじめ排除されるべきではないのではないかと。もしもある選択肢を排除すれば、それは女性の生き方の可能性を狭めこそすれ、決して拡大するものではないと思う。なるほど、この世界は不完全であろう。しかし誰にも、その不完全な世界を前提にして、最善の人生を選択しようとする権利がある。

風俗嬢一人ひとりの内面に仔細に立ち入ってみれば、誰もが真剣に、また最善に生きようとしていることは間違いない。それは、風俗嬢でない人びとがそうしているのとまったく同じである。そのことに私は、まったく同意する。けれども、それは、風俗産業に従事しない人びとが、性的サービスに対して抵抗感(偏見)をもつべきでない、ということの意味しない。この世界は不完全であるのだから、さまざまな考え方の人びとが共に生きる現状を甘受するほかはないのだ。

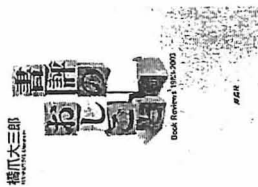
おまけ「出版ニユース」
2005.12月号

「書評のおしごと」

橋爪大三郎著『はじめての構造主義』によって、構造主義の手はときを受けた読者も少なくないのではないかと。明快・論理的な思考で知られる社会学者・橋爪大三郎氏のこれまでの書評の集成が『書評のおしごと』(A5判・382頁・2500円+税)として刊行されている。

著者は1980年代、ニユーアカ・ブームの渦中に登場以来、国内外の動向・思潮を客観的に見すえた著作と発言で論壇をリードしてきた。その著者のこの20年間(83年~03年)の書評の初めての集成。

思想を読む、社会を読む、知の前後を読む、世界



を読む、時代を読む、生活文化を読む、解説・論文とブックガイド、インターネット鼎談書評(小林恭二・広瀬克哉・橋爪大三郎)に分けて、約200冊が収められている。

著者のフィールドの広さには改めて感心させられる。細川周平『レコードの美学』、池田清彦『分類という思想』、今野浩『数理解定法入門』、隈研吾

『新・建築入門』なども準備範囲である。

「あとがきにかえて」の「書評を書くということ」は著者の「書評論」として興味深い。〈書評の書き手は、たいてい、本の著者、つまり、自分も書評される側の人間だ。／本の著者たちが、そうやって順番に、読者となり評者となって、互いの本について意見をのべあい、共同で評価を確立していく。その一つひとつのやりとりが、書評なのだ。／当然、そこには、ルールというものがある。公正であること。公平であること。正確であること。率直であること。著者がどんなに著名で、権威であろうと(あるいは、なかろうと)、知り合いだろうと、誰だろうと、今度書かれた本のなかみに即して、その本から言えること(だけ)をはっきりのべる。こうした公開の応酬が、それぞれの本の価値を明らかにして

いく。

さらに書評は必ず褒めることにしている。やまやうと読んで楽しくないだろう。褒めるのがむずかしい。本の書評は原則としてひき受けない。書評は書き慣れることがない。書評はむずかしい。最初の一行に書評の作業の半分くらいの時間がかかると言ってもよい——著者の書評に対する心構えも明快である。

海鳥社 〒810-0074 福岡市中央区大手門3-6-13 電話 92-7711-0132